

授業科目概要 (講義内容を変更することがあります。)

	授業科目の名称	講義等の内容
分野 共通	医療科学特論 A	健康においてそれを支える3つの要素、心の持ち方、食生活の在り方そして運動が重要であることは広く認識されている。これらの因子で現代医学研究によって明らかになって来たことを中心に講義を行う。食においては長寿遺伝子とそれを刺激する因子および刺激をすると具体的にどんな変化が起こるか、また食生活の改善が病人および病氣一歩前の人たちにどのような影響を与えるか、また健康の尺度はどのような検査によって可能となるか、さらには新しい検査の在り方などをそれぞれの専門家が、専門的な立場から分かり易く講義する。
	医療科学特論 B	現代医療において重要なテーマとして、チーム医療がある。チーム医療を実現するために医療従事者が身に付けておかなければならない基礎知識として、各専門分野の教員が、もっとも重要であると思うトピックを選びオムニバス形式で講義を行う。内容は、さまざまであるが、チーム医療を効果的に実施していくうえで、欠かすことのできない知識を得ることができるだろう。また、この講義で学習したことを元に、臨床において、チーム医療はいかにあるべきかを考察し、深めていくことが望まれるのであって、学部の講義に比べると、より実践的、臨床的な講義となるだろう。
	医療科学特論 C	専門職としての生涯学習の観点から、継続的な能力開発・人材育成において基盤となる理論を理解し、生涯学習支援、実践教育環境の開発・改善の方略を検討する。具体的には、学習理論・教育理論に関する文献クリティーク、学習環境のデザイン、人材育成の方法について学習し、実際の教育計画を批判的に分析し、人材育成と活用に必要な洞察力や判断力、問題解決能力を修得する。
	臨床医療科学特講 A (修士)	現在の医療は専門化が著しく進み、専門外のことに非常に疎くなりつつある。医療に携わる者としては、個々の専門分野以外に広く医療全体の概略を把握しておく必要がある。そこで医療従事者が知っておくべき基本的な重要である項目「医学とは何か、医療制度と保険制度、医療法制と医療事故、医療現場の現況、病院経営とリスクマネジメント、チーム医療の実際等」を概説し、その実際を学ぶ。
	臨床医療科学特講 B (修士)	WHO 憲章によれば「健康とは、身体的、精神的、および社会的に完全な状態であって、ただ単に疾病や虚弱ではないということではない」とされている。医学的、運動生理学的見地から「健康」について考察し、健康の意義、疾病、特に成人病、生活習慣病に対する医療従事者が取るべき思考過程、実践行動について指導する。さらに命の尊さ、尊厳死について学生同士のディベートを企画、思考を深める。具体的には身体の構造、生理、機能に関しての最低限の知識のほか人文科学的見地からの探求を行う。
	外書講読 I	科学研究の推進には世界的に情報を収集することが不可欠であり、英語で書かれた学術論文を読み解く能力は必須である。また、自身の研究成果を広く知らせる為には、わかり易くプレゼンテーションする能力が必要である。本授業では英語の文献を用いて外書講読の能力を養う。受講者は専攻する分野の研究に関する英語論文等を読み理解し、内容をまとめて発表する。また、担当教員や他の受講者の質問に答える。
	外書講読 II	科学研究の推進には世界的に情報を収集することが不可欠であり、英語で書かれた学術論文を読み解く能力は必須である。また、自身の研究成果を広く知らせる為には、わかり易くプレゼンテーションする能力が必要である。本授業では英語の学術論文を用いて外書講読 I 等で磨いた英文読解能力やプレゼンテーション能力を磨く。同時に学位論文執筆を視野に入れ、表現方法などの執筆技法も学ぶ。受講者は専攻する分野の研究に関する英語学術論文を読み解き、執筆技法も含め内容をまとめてプレゼンテーションする。そして、担当教員や他の受講者の質問に答える。

	授業科目の名称	講義等の内容
分野 共通	医学統計特論（修士）	医学・医療分野では決定論的な結論を導くことが困難な場合には、データを統計的方法で分析して結論を求めることが多い。本講は既に学部で基礎統計学を学んだことを前提により深く、統計基礎と医学応用を中心に学ぶ。基礎では、確率変数と分布、大数の法則、中心極限定理、近似表現、推定理論と検定理論にスポットを当て、統計の考え方を理解することに重点を置く。医学応用では、標本の大きさデザイン、分散分析 ANOVA、臨床試験と疫学における利用について理解する。医学・医療で使う統計手法を理論と応用の両面から修得する。
	医療安全管理学特講（修士）	医療安全対策は世界各国で活発化してきており、わが国においても 2001 年に設置された「医療安全対策検討会議」が報告書をまとめ、医療の安全が確保され信頼される医療実現のための政策が打ち出され、医療関係者官民一体で取り組んでいる。本講義では、現在のわが国の医療安全対策を理解し、1) 医療安全の確保の課題と解決方策 2) 今後の医療安全対策 3) 国として当面取り組むべき課題等、について先進国との比較検討すると共に医療従事者として必要な医療安全に対する知識を習得する。
	医療倫理学特講（修士）	医療倫理はヒポクラテスの時代から唱えられているが、最近の医療の進歩に伴い、その重要性はますます高まっている。本特論では①インフォームドコンセント、②臨床試験の倫理、③動物実験の倫理、④脳死と臓器移植、⑤緩和ケアの倫理、⑥災害医療の倫理、⑦告知、⑧チーム医療の倫理、⑨生殖医療の倫理など、さまざまな医療倫理の課題について、現場の事例も交えて議論を深める。
	病態学特論	本講義は次の項目に沿って授業と研究指導が行われる。1) 解剖学・組織学・病理学の基礎と臨床を学ぶ。2) 疾病の病態や研究目的に対応した方法論を用いて形態研究や臨床研究の指導。①小分子生理活性物質に対する抗体の作成法。②各生物材料の形態学、発生学、分子生物学の解析方法。③共焦点レーザー顕微鏡および電子顕微鏡を用いて高解像度のイメージと三次元情報の再構築法。
放射線 情報学 分野	診療放射線研究方法論	この科目では、診療放射線技術に関連した研究の基盤として、研究デザイン、研究目的および研究計画書の作成方法について概説する。これにより各自の研究課題に適切な研究方法を選択できる力を身に付ける。また、論文検索の仕方や実験の進め方、学会発表のためのスライド作成の仕方とルールについて説明する。この科目の到達目標は、授業成果として、受講者が指定された課題について作品（スライド・研究計画書）を作成し発表できることである。
	画像処理特論	本講義は、診断に利用する医療画像について、入力から処理アルゴリズムまでを理解することを目的としている。画像情報処理といっても、その基本となるデジタル画像処理の方法について講義する。具体的には画像の数学的表現、画像の標本化と量子化、階調変換、直交交換、フィルタリング処理、医用画像のセグメンテーションなどについて講義する。画像処理に必要な知識・画像処理システム・画像解析ソフトの理解を目的とする。
	核医学特論	核医学検査法の特徴は、種々のトレーサを用いて生体の機能を反映する画像が得られることである。とりわけ PET を用いた機能画像では定量的測定精度がすぐれている。しかし、PET 検査ではサイクロトンなど巨額の設定が必要で日常診療には限界がある。一方、SPECT を用いて機能画像の定量化を行えば日常診療にきわめて有用であり、核医学検査法としての診断精度の向上につながる。定量化に必要な SPECT や PET 装置の基礎知識、臨床では脳神経系と循環器系の定量化とその有用性について講義する。

	授業科目の名称	講義等の内容
放射線情報学分野	画像解剖学特論	画像診断の基礎となる各器官系の正常構造と機能を深く学習、理解すること、正常構造の学習を基礎にして、実際の臨床例を専門家の指導のもと観察する経験を重ね、画像情報に関する科学的な分析力、診断力を高めることを目的とした授業です。診療放射線技師を初めとする画像診断に関わる医療技術者に画像解剖学、画像診断学に関する最先端の知識と技術を習得し、その基盤となる正常構造の知識を復習し、深めて欲しいと考えています。
	診療放射線教育学特論Ⅰ・Ⅱ	診療放射線技術における人材育成が質の高い診療放射線技術の基礎をなすという観点から、教育的機能の基本を理解し、診療放射線技師教育の歴史の変遷、技師教育制度について概説する。また、実践診療放射線技師職としての役割を果たすために必要な教育原理や教育方法を概説し、専門職種としての自己教育力や生涯教育力を備えられるようにする。授業内で、受講者が選択した授業課題の指導計画・指導案を作成し、模擬授業を実施し、授業実施者としての課題を明確にする。
	キャリア・リーダーシップ開発特論	より良い医療を提供するため診療放射線技師専門職の果たすべき役割としてのリーダーシップを修得することを目的とする。この科目ではキャリアデザイン、リーダーシップとは、リーダーに必要なレジリエンス、焦りをコントロールするリーダーシップなどについて説明する。事例ワークショップを通してリーダーシップを実践するために必要な知識、問題解決能力、調整能力、リーダーとしての意思決定・発信力などの能力を修得する。
	放射線生体応答学特論	放射線は医療分野において、画像診断、がん治療に応用されている。しかし、放射線被ばくによる生体への悪影響が懸念される。さらに原子力発電所事故やテロの脅威により放射線被ばくへの関心は高まっている。本講義では、以下の項目について講義と研究指導を行う。1) 放射線による生体応答反応を概説する。2) 放射線被ばく防護・緩和に関する知識を習得する。3) 生体応答反応を生化学的に解析する技術を習得する。
医療栄養学分野	病態栄養学特論	最初に人体の主要各臓器における栄養素の代謝過程を概説し、次に健常な状態にあるときと、病態時における栄養素代謝の異なりについて疾患別に見てゆく。具体的には次のような内容を講義する。1) 五大栄養素の主要臓器組織における代謝 2) 肝および腎疾患の病態と治療時における栄養素代謝の変化 3) 循環器系疾患の病態と治療時における栄養素代謝像の変化 4) 糖尿病の病態と治療時における栄養素代謝像の変化 5) 循環器系疾患治療に大きな影響を与える栄養学的問題点 6) 外科治療における栄養学的問題点 7) まとめ
	機能性高分子特論	動物の細胞には、細胞骨格や細胞接着装置といった、複数のタンパク質から構成される超分子構造が存在する。これらの超分子構造は、細胞の移動・増殖・分化・がん化などに際してダイナミックに解体や再構成が行われる。本講義では、超分子構造および細胞外マトリックスを構成するタンパク質および多糖の構造と機能についての講義を行い、超分子構造に対する理解を深める。また、関連する論文を講読してこの分野の近年の進歩を学習する。
	生体化学特論	糖質、タンパク質などの生体高分子の構造や化学反応、分子間の会合や分子認識などナノバイオプロセス学について理解を深める。さらに生物を模倣した(あるいは超える)、多彩な機能分子を集積した超分子の世界について、超分子自己集合(らせんやカテナン構造)や分子マシン(分子シャトル、分子ボールベアリング)などの非生物的システムについて概説する。また生体成分や分子集合体、複合体の分析法、構造決定に必要な手法と原理について講義と演習を行う。

	授業科目の名称	講義等の内容
医療栄養学分野	内分泌代謝栄養学特論	本特論では、糖尿病をはじめとする代謝異常性疾患に関して、栄養素と生体の相互作用、病態発症と栄養との関連を中心に生化学的、分子生物学的視点から講述する。概要は次のとおり。①糖尿病について ②糖尿病治療における栄養素の役割 ③脂質異常症について ④脂質異常症治療における栄養素の役割 ⑤肝炎について ⑥肝炎治療における栄養素の役割 ⑦糖取り込みの分子機構 ⑧その他の代謝異常性疾患について
	分子・細胞栄養学特論	栄養素による疾患に対する進行抑制効果発現の分子・細胞生物学的メカニズムを、ヒト検体、ヒト由来培養細胞、疾患モデル動物、細胞内小器官、細胞を構成する各種分子等を用いて研究する方法とコンセプトを講義する。これらのバイオアッセイ系を学ぶことで、研究現場で食品成分の効果をスクリーニングするための基礎知識と基本的技術を習得する。
	公衆栄養学特論	人間集団の健康増進と疾病予防のためには、人々が自らの健康とその決定要因をコントロールし、改善することができるようにするヘルスプロモーション活動が必要不可欠である。そこで本特論では、公衆栄養の視点から地域社会における健康・栄養問題とそれに関連する自然、社会、経済、文化的諸要因の情報を収集・分析し、科学的エビデンスに基づいたヘルスプロモーション活動に資する企画立案できる能力を養う。さらに、関連する組織や専門職種と連携して社会に貢献できる栄養の専門職の指導者を目指す。
臨床検査学分野	臨床検査学特論	検査データの解釈時に利用される基準範囲・病態識別値・カットオフ値の特徴、外部及び内部精度管理法による検査結果の品質保証の仕方を説明する。さらに、各種疾患の診断及び治療経過を追う上でどのような臨床検査が実施され、得られた検査結果がどのように解釈されるかなどを、検査全般に亘って解説する。
	臨床化学分析特論	臨床化学検査の標準化体系を紹介し、今日の臨床検査の精度が国際的にどのようにして保証されているかを説明する。そして、血清や尿中の糖・脂質・含窒素成分・酵素・無機質・電解質など種々の成分の定量法を説明し、分析前及び分析時に発生する問題点を解説する。
免疫学分野	免疫生物学特論	私たちが健康を維持するためには、生体外から侵入する異物や生体内で生じる異常細胞や老廃細胞を排除することが必須ですが、それを行う生体機構が免疫システムで、この免疫システムを探る学問が免疫学であります。本講義では、抗原、抗体、補体といった免疫学の基本的事項及び生まれながら持つ免疫能力（自然免疫）と生まれた後に得る免疫能力（獲得免疫）の違いを含めて、免疫システムの概要についてまず解説します。そして免疫システムを構築する免疫細胞の機能と役割および情報交換方法について詳しく学びます。さらに、感染免疫、腫瘍免疫に加え、アレルギーや自己免疫疾患、免疫学的検査法および免疫学的治療法といった臨床免疫学について解説すると共に、栄養や運動と免疫との関わりについても触れます。
	分子遺伝学特論	分子遺伝学とは、基本的にはDNAとRNAの2種類の核酸の相互関係とそれらのタンパク質(ポリペプチド)合成との関わりについての学問である。本授業では、先ずゲノム・遺伝子とその本体である核酸について解説します。次に遺伝子の複製と発現機構に関して解説します。そして遺伝子と疾患の関係や遺伝子の診断・治療について解説します。さらに分子遺伝学的研究手法について解説します。

	授業科目の名称	講義等の内容
臨床検査学分野	臨床血液検査学特論	臨床血液検査学では、血液疾患の病態生理を分子病態学の面から検査・解析し、臨床医学への実用的応用に寄与することを目的とする。本講座では、血液および血球の成熟と機能に関与する造血組織、さらに日常よく行われる血液学的検査所見について講義・演習を行う。また、止血機構は、脊椎動物に備わった生命維持に必須の防御システムであるが、その破綻から近年、増加傾向にある心筋梗塞・脳梗塞に代表される血栓症について、血栓形成のダイナミックな変化を学習し、出血傾向・血栓傾向の病態生理、検査、診断・治療について講義・演習を行う。
	病理組織検査学特論	がんについて病理組織学的知識を基礎に多角的視点から学ぶ。良性腫瘍、悪性腫瘍、炎症や先天性疾患等についてのあらゆる疾患を病理組織学的、細胞学的に解明する。疾患に関する用語・概念の習得、理解が必要である。各臓器の系統ごとに、病態がどのような疾患を引き起こすのかにつき具体的に学習する。たとえば肉眼的、組織学的、細胞学的、遺伝子といった細胞レベルの原因を探究する。腫瘍の持つ組織構築がどのような意味があるのかを認識して疾病の持つ特殊な病態を把握する。
	分子細胞病理学特論	分子細胞病理学特論では、腫瘍の発生ならびに増殖、浸潤・転移などの腫瘍進展に関わる分子異常や遺伝子異常について説明をする。また、病理検体・細胞診検体から遺伝子異常を検出・解析する技術 (Fluorescence in situ hybridization法、レーザーマイクロダイセクション、NGS解析など) について解説する。
	細胞診検査学特論	良性腫瘍、悪性腫瘍、炎症性変化等の細胞形態を理解して確定診断へと導くことを目的とする学問である。細胞は核内の遺伝子の傷やウイルスの侵入、ホルモンの影響によりさまざまな形態に変化する。その変化を顕微鏡下で正確にとらえることで炎症の程度、感染症の有無、がん診断が可能となる。また、がんになる前段階である異型細胞も判定可能であり、前がん病変として細胞診断することができる。婦人科、呼吸器、泌尿器、乳腺、甲状腺などの領域における病理組織像と細胞診像の形態を理解して疾病との関連性を把握する。
	細胞診検査診断学実習	細胞診は泌尿器領域の尿、呼吸器領域の喀痰のように自然排出される検体と乳腺、甲状腺などから穿刺吸引して得られる検体とがある。採取された細胞を塗抹、固定、染色して細胞診標本が作成される。細胞検査士は顕微鏡下で細胞診標本をスクリーニングして良悪を判定して質的に細胞判定する。実習では各臓器の細胞診標本作成方法、スクリーニング方法、質的診断同定法を中心に学ぶ。
	細胞診画像診断学特論	体内に潜んでいる細胞は、各臓器に特徴的で、例えば、喀痰は、気管支、肺由来の細胞が剥離され、尿中には膀胱由来の細胞が自然排出される。よって、人体の臓器にウイルス感染、遺伝子異常が存在すると、その疾患の臓器に反映された細胞が細胞診検体として排出される。細胞診検体のPapanicolaou染色を行い、顕微鏡で写真撮影した画像の正常細胞、異型細胞、がん細胞等の細胞学的形態を正確に理解する。
理学療法学分野	運動制御学特論	運動制御の要となる神経筋機能の理解は、機能評価の他、治療効果の判定にも有用である。電気生理学的手法の中には非侵襲的なものも多く、理学療法士にも計測可能である。しかし、臨床応用においては計測、分析とも理論的背景の理解と十分な経験が要求される。本講義においては、①電気生理学、神経生理学の理解、②計測技術の習得、③臨床家のための波形信号処理の基礎の理解、④ソフトウェアによる信号処理技術の習得を目的とし、臨床研究に役立てることを目的とする。
	臨床生体力学特論	運動障害のメカニズムを理解し、理学療法に応用するために、モーションキャプチャ等の手法の習得は有効な手段である。本講義では、①モーションキャプチャの原理、②床反力計、圧力分布計による運動力学計測、③逆運動力学解析手法による関節モーメント、筋張力の推定法について教授する。

	授業科目の名称	講義等の内容
理学療法学分野	臨床生体力学特論	さらに、臨床でも独力で計測が可能となるよう、実験、演習を実施する。加えて、計測結果の解析演習を行い、臨床研究力を高めることを目的とする。
	運動機能障害学特論	四肢・脊柱の関節運動機能障害に対して、根拠に基づく実践的な理学療法を施行するために必要な科学的知識、分析能力の獲得を目的とする。学習にあたっては解剖学・運動学・神経生理学的知識が必要となる。関節運動機能障害に対応していくために必要な機能解剖学的分析、拘縮・疼痛メカニズム解明、理学療法介入の効果検証をテーマとし、各テーマの臨床的な問題提起に対し、文献検索、批判的吟味のステップで問題点に対応する方法を学ぶ。
	理学療法メカノバイオロジー特論	力（機械刺激）が深く関わる生体现象のうち、理学療法分野にとくに関連するものについて、生物学の視点で理解を深める。機械刺激に対する組織・細胞レベルの応答に着眼する。現象の例として、運動による筋肥大や萎縮予防、あるいは骨密度の維持・向上がある。数回の講義の後、演習（調査、発表、議論）を中心に進める。
	徒手理学療法学特論	四肢・脊柱の関節運動機能障害に対し徒手理学療法を施行するために必要な各検査・治療手技の基礎知識の獲得を目的とする。 学習にあたっては解剖学・運動学・神経生理学的知識が必要となる。講義だけでなく演習・実習を通して徒手理学療法について学ぶ。
作業療法学分野	作業療法理論学特論	作業療法では様々な理論を用いて治療が行われている。本科目では、この作業療法の理論がどのように生まれてきたのかを歴史の変遷をもとに学習し、そのいくつかの作業療法の理論について説明を加え、理論の特徴、考え方、患者への適応などを理解する。さらにそれぞれの理論を作業療法の対象とする事例に応用し、臨床現場で治療に用いることができるモデルを作成する。
	作業活動生体反応学特論	本科目では、作業活動が生体にどのような影響を及ぼすのかを自律神経および主観的心理反応において概説する。加えて、作業活動の自律神経系に対する効果器の反応について学習し、その反応と作業活動の関係を理解する。また、主観的心理反応についても作業の影響を検討する方法について説明する。これらの反応をみることにより作業活動がどのように作業療法の治療に応用ができるかを検討する。
	上肢運動器障害治療学特論	手外科疾患をはじめとした上肢の運動器疾患に対する作業療法プログラムを効果的に実施するために、その効果予測・検証およびメカニズム解析の方法を修得することを目的とする。根拠に基づいた有効な作業療法プログラムを実践するためには、解剖学、運動学、生理学の基礎的知識とともに、さまざまな情報発信・収集能力が必要となる。それらの知識に加え、作業療法プログラムの効果検証やそのメカニズム解析に必要なさまざまな研究技法について、実験、演習を行いながら学習する。
	作業活動分析学特論	本科目では、作業活動の分析を上肢機能に着目して実施していく。ADLや家事、仕事、遊び、趣味活動など、多くの作業活動を実施するうえで重要となるのは上肢機能であり、上肢機能には、関節可動域、筋力、感覚、耐久性、協調性、巧緻性などさまざまな機能が関わっている。これらさまざまな機能や他機能との関わりを知ることもおよびその解析方法の学習を通して、作業活動の分析方法を修得することを目的とする。
	医療福祉経営学特論	医療福祉分野・事業における以下の項目に関して、講義と事例研究・実態調査や経営分析等を通して、医療福祉事業の経営実践に向けた知識技能を修得し、経営管理者の即戦力育成を目指す。（１）社会保障制度

	授業科目の名称	講義等の内容
医療福祉学分野	医療福祉経営学特論	内容とその背景・動向①医療・保健②医療保険③年金保険④社会福祉(2)財務管理・会計管理①財務分析とその手法②財務会計論と管理会計論(3)人事労務管理①人事管理論②労務管理論(4)組織運営・情報管理①組織論②コンプライアンス・法令遵守③情報システム論④リスクマネジメント(5)マーケティング①マーケティング理論②市場分析(6)経営戦略論
	福祉専門職特論	社会福祉実践に従事するソーシャルワーカーは、職業上において専門的職業従事者として位置づけられている。ソーシャルワーカーが職務を遂行するにあたって、専門職は、どのような特性をもっているかを正しく理解することが重要となる。本授業では、一方では職業としての専門職の特性、成立条件や成立過程などを学び専門職理解を図ることを目標とする。また、他方では、ソーシャルワーカーが専門職として、その資質向上を図るために必要な人材育成の方法を学ぶとともに、将来ソーシャルワーカーを目指す学生に対して実習を通じた教育・指導方法を学んでいく。さらに、人材育成のためのプログラムを実際に作成し、その内容について精査していく。
	医療福祉学特講	本科目においては、人の人生に突然襲ってくる「疾病」や「障害」に対するソーシャルワークの専門性について学ぶことを目的とする。「疾病」や「障害」は、その当事者や家族を計り知れないほどの苦しみに直面させるものであり、さらに「死」は人間の生命のはかなさを家族に突きつけると共に、すべてが無に帰することの寂しさや孤独を感じさせる。 本科目においては、このような局面に対して解決の糸口を探りながら共に歩む専門職「医療ソーシャルワーカー」に焦点を当てて学びを深めることにする。 具体的には以下の内容について学ぶこととする。①患者にとって「病」とは何か、②専門職に求められる人間観、③入院・受療支援、④退院支援、⑤チームアプローチ、⑥多職種連携・協働による支援、⑦組織間連携、⑧ネットワーク、⑨医療機関の機能、⑩社会保障制度・関連法制度ほか。
	地域包括医療・福祉特論	保健医療サービスを要する人々を地域で生活・人生を営む主体者としてとらえ、全人間的医療の担い手の一員として、保健医療ソーシャルワークの在り方を希求する。地域における生活の主体者の尊厳ある人生を支援する価値を身に着け、保健医療ソーシャルワーカーとしてのマイクロ支援から保健医療・福祉・教育・司法の様々な分野との連携・協働の方法、政策の在り方に対する検討まで、メゾマクロ・マクロ支援についての研究を行う。
臨床心理学分野	精神医学特論 (保健医療分野に関する理論と支援の展開)	公認心理師及び臨床心理士受験資格に必要な科目である。医療・保健機関で心理専門職として働くために必要な基礎知識を習得し、チーム医療を実践するための基本的な医学知識や他の専門職に関する知識および支援の実際と他職種との連携について学ぶ。特に、精神医学の知識(精神疾患の特徴、薬物療法、心理療法など)を学び、重要な諸問題について討議し、理解を深め、臨床場面で対応できるようになることを目標とする。
	障害者(児)心理学特論 (福祉分野に関する理論と支援の展開)	公認心理師及び臨床心理士受験資格に必要な必修科目である。福祉分野の対象となる子ども、障害児(者)、高齢者の心理に関する基本的な知識や理論を学び、彼らへの支援及び他の専門職(行政職、医師、教師等)との連携について具体的な事例を通して学ぶ。
	教育心理学特論 (教育分野に関する理論)	公認心理師及び臨床心理士受験資格に必要な科目である。スクールカウンセラーや大学カウンセラーなど教育分野で働く心理専門職として必要な

	授業科目の名称	講義等の内容
臨床心理学分野	と支援の展開)	基礎知識を習得し、児童（生徒・学生）および保護者への支援と他職種（教師、医師、行政職員など）との連携について具体的な事例を通して学ぶ。
	犯罪心理学特論 （司法・犯罪分野に関する理論と実践）	公認心理師及び臨床心理士受験資格に必要な科目である。非行や犯罪が生じるメカニズムと更生のメカニズムについての基礎知識を学び、支援と他職種との連携について具体的な事例を通して学ぶ。また、犯罪者の心理だけでなく、被害者の心理、家庭内紛争にある子どもや家族の心理についても学び、彼らへの支援についても学ぶ。
	産業・労働心理学特論 （産業・労働分野に関する理論と支援の展開）	公認心理師及び臨床心理士受験資格に必要な科目である。労働関連法規や産業保健など産業・労働分野に関する理論や知識を学び、過重労働やハラスメント、リワークなどこの分野で心理職の関与が必要な問題と支援について具体的な事例を通して学ぶ。
	家族心理学特論 （家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践）	公認心理師及び臨床心理士受験資格に必要な科目である。支援を求める者に関わる家族やコミュニティ（家族・学校・職場等）も視野に入れたアセスメントと支援の方法について具体的な事例をもとに学ぶ。また、離婚や再婚に伴う多様な形態の家族やシングル家庭等、近年新たに生じてきた家族形態が抱える問題とその支援についても学ぶ。
	健康心理学特論 （心の健康教育に関する理論と実践）	公認心理師及び臨床心理士受験資格に必要な科目である。本講義では、メンタルヘルス不調の予防や、ストレスへの気付きと対処の促進といった「心の健康教育」に関連する理論と知識を学ぶ。また、保健医療・教育・福祉・産業等のさまざまな分野において、「心の健康教育」を実践する上で必要なスキルを実習形式で学ぶ。
	臨床心理査定演習Ⅰ （心理的アセスメントに関する理論と実践）	公認心理師及び臨床心理士受験取得に必要な科目である。クライアントや患者を理解するため心理的アセスメントは心理臨床場面で非常に重要である。心理臨床場面で使用するアセスメント方法、各種心理検査（アセスメントツール）作成の理論的背景、使用方法、分析方法など基礎知識の獲得を目的とする。学習にあたっては心理臨床場面において独力で査定が可能となるよう、演習を通して心理検査の種類、基本的知識、使用する際の基本的技術、それらの記録、結果の解釈、報告書の作成を習得する。
	臨床心理査定演習Ⅱ	臨床心理士受験資格に必要な科目である。心理臨床の実践の場でよく使用される心理検査の実施および分析方法、フィードバックについて具体的な事例をもとに学ぶ。（事例を紹介しながらより実践的に学ぶ）
	臨床心理面接特論Ⅰ （心理支援に関する理論と実践）	公認心理師及び臨床心理士受験資格に必要な科目である。心理支援の実際について学ぶ。インテーク、治療の開始、クライアントの心を理解するための理論、カウンセラーの取るべき態度、心理療法の過程、子どもの心理療法等について学ぶ。（心理面接の基礎） （公認心理師） ①力動論に基づく心理療法の理論と方法と実践 ②行動論・認知論に基づく心理療法の理論と方法 ③その他の心理療法の理論と方法 ④心理に関する相談、助言、指導等への上記1から3まで応用 ⑤心理に関する支援を要する者の特性や状況に応じた適切な支援方法の選択・調整
臨床心理面接特論Ⅱ	臨床心理士受験資格に必要な科目である。心理臨床の現場でカウンセリングを実践するために必要な知識と技術を身につける。実際に出会う可能性のある事例を想定し、見立て・心理療法の導入・心理療法過程を理論的実践的に学ぶ。	

	授業科目の名称	講義等の内容
臨床心理学分野	臨床心理学特論 I	臨床心理士受験資格に必要な科目である。心理療法にはさまざまな学派やアプローチがあるが、実際の臨床場面においては、クライアントの特性や状況、セラピストの個性にあわせて、さまざまな理論や技法を統合して対応している。それぞれの現場やクライアントに適したアプローチを実践することができるようになるための基礎を学ぶ。
	臨床心理学特論 II	臨床心理士受験資格に必要な科目である。本講義では、保健医療分野で働く心理職に求められる知識と役割を学ぶ。身体疾患を抱える患者とその家族の心理について理解を深めるとともに、患者・家族(遺族)に対する心理社会的ケアや、対人援助職に求められるコミュニケーションスキル、多職種と協働するチーム医療について学ぶ。
	臨床心理学研究法特論	臨床心理士受験資格に必要な選択科目である。臨床心理学の代表的な研究法として事例研究について学ぶ。事例研究の果たす役割、形式、テーマの立て方、考察の進め方などの基本について学ぶと同時に、自ら担当したケースを事例研究としてまとめる上での注意、倫理についても学ぶ。
	人格心理学特論	臨床心理士受験資格に必要な選択科目である。将来心理専門職として臨床心理学的援助を行うにあたり、各種心理検査(質問紙法検査、投影法検査等)についての実施法だけでなく、成り立ちや背景となるさまざまな人格理論を学ぶことを通して修得することを狙いとする。さらに、人格心理学に関する近年の主な研究テーマについて、国内外の文献講読を通して理解を深める。
	投映法特論	臨床心理士受験資格に必要な選択科目である。ロールシャッハ・テスト、TAT など投映法心理検査の理論的背景と技法の修得を目的とする。被験者の人格の特徴や問題点を把握することは支援の目標や道程を計画する上で欠かせない作業であり、心理実践の基礎となる学習である。
	心理療法特論	臨床心理士受験資格に必要な科目である。本科目では、心理療法のうち主に認知行動療法を取り上げ、その前提となる理論的背景にはじまり、アセスメント、ケースフォーミュレーション、主要な介入技法について学ぶ。また、気分障害、強迫性障害、不安障害、不登校・ひきこもり、PTSD に対する認知行動療法の具体的な進め方を紹介し、心理臨床の実践に必要な基本的知識の習得を目指す。
	臨床心理基礎実習	臨床心理士受験資格に必要な科目である。臨床心理実践の基本的態度や技能、倫理を学び、あわせて臨床心理実習に向けた事前指導を行う。臨床心理学の理論と方法を実践にいかすための基礎的なトレーニングを実施し、心理専門職として活動するために欠かすことのできない素養や技能を学習する。なお、この授業の単位取得は鈴鹿医療科学大学附属こころの相談センターの研修相談員の条件となるので、必ず1年次に履修すること。
	臨床心理実習 I	臨床心理士受験資格に必要な科目である。2年次に開講される。本学附属こころの相談センターにおける実習と、大学外の実習協力施設における実習を行い、それについてまとめることを学ぶ。ケースカンファレンスで発表したり参加することも経験する。
	臨床心理実習 II	臨床心理士受験資格に必要な科目である。2年次に開講される。本学附属こころの相談センターにおける担当ケースや学外施設での実習に関して、個別スーパービジョン、グループスーパービジョンなど多様な指導を受け、実践に関する学びを深める。

	授業科目の名称	講義等の内容
臨床心理学分野	心理実践実習 A (相談センターでのケース,SV)	公認心理師受験資格に必要な科目である。大学附属こころの相談センターにおいて,実際にケースを担当し,心理検査や心理療法を行い,スーパーヴィジョン (SV) を受ける。
	心理実践実習 B (GSV とケースカンファレンス)	公認心理師受験資格に必要な科目である。こころの相談センターにおいて担当したケースについて,グループスーパーヴィジョン (GSV) を受けたり,ケースカンファレンスで発表したりする。ケースについてまとめることができること,様々な視点から観ることができるようになることを目指す。
	心理実践実習 C (外部実習)	公認心理師受験資格に必要な科目である。学外施設 (医療,教育,福祉施設) での心理的な支援を求める人への関わりを行う。施設内の見学や陪席などを通して,医療・教育・福祉・司法など幅広い領域における心理的な支援や多職種連携,地域連携について学ぶ。
	心理統計法特論	臨床心理士受験資格に必要な選択科目である。医学・医療分野では決定論的な結論を導くことが困難な場合には,データを統計的方法で分析して結論を求めることが多い。本講義は既に学部で基礎統計学を学んだことを前提により深く,統計基礎と医学応用を中心に学ぶ。基礎では,確率変数と分布,大数の法則,中心極限定理,近似表現,推定理論と検定理論にスポットを当て,統計の考え方を理解することに重点を置く。医学応用では,標本の大きさデザイン,分散分析 ANOVA,臨床試験と疫学における利用について理解する。医学・医療で使う統計手法を理論と応用の両面から修得する。
臨床工学分野	生体信号処理特論	心電計,超音波診断装置などの生体計測機器では様々な信号処理技術が用いられている。また生体システムの解析においても信号処理は重要な役割を担っている。本講義では,生体信号処理について基礎から最近の研究例までを解説する。主な内容は,生体システムと生体信号,フーリエ変換,不規則信号,線形システム,信号のデジタル処理,スペクトル推定,時間-周波数解析,適応信号処理,生体システムの解析,最近の研究事例紹介である。
	肺循環機能学特論	肺循環に関して,現在の呼吸生理の基礎についての知識を確認し,頻用されている,主に肺血管形態,機能に関する実験手法について紹介する。また,それらを用いた実験結果から,肺循環の特徴についての理解を深め,肺血管機能に異常を来す病態について理解する。
	電気生理学的治療機器特論	循環器領域では,不整脈,心不全の治療に電気生理学的治療機器が欠かせない。本講義では,心臓電気生理学の基礎を学んだ上で,ペースメーカーや ICD, CRT の適応疾患,関連心電図の基礎を修得する。その上で,ペースメーカー, ICD, CRT の構造,動作,トラブルシューティングについて基本的事項を修得する。また,関連する循環動態の変化についても修得する。実際に使用されるペースメーカープログラマを使用したデモンストレーション,各種設定の基礎,ペースメーカー心電図についても学ぶ。
	生体システム工学特論	生体システム工学,或いはシステムバイオロジーの内容は多岐にわたるが,その中から臨床工学に関連が深いと考えられる,呼吸・循環・代謝系への数理生理学的なアプローチについて講義する。微分方程式による連続時間システムの記述,位相平面を用いたシステム解析といった,初学者にも平易な方法を用いて,呼吸・循環・代謝系の理解を深めることが目的である。

	授業科目の名称	講義等の内容
臨床工学分野	医用電気・電子工学特論	近年の医用計測機器、治療機器のほとんどは電気・電子回路技術を応用している。これらの機器を開発する者のみならず、使用者にとっても電気・電子工学の基礎知識は重要である。工学分野の出身でなくとも電気・電子機器に親しみが持てるように実践的な講義を行う。
	医療情報システム特論	医療情報システムの設計開発プロジェクトのマネジメントをその基礎知識体系（PMBOK）に従って教育していく。基本事項の説明の後、具体的な開発事例を取り上げ、ブレインストーミング形式で総合討論する形で深く理解する形式をとる。
医療情報実践学分野	画像認識システム特論	画像認識システムを自作のプログラムにより開発できる能力を身につけるための教育を行う。具体的には大量の画像形式のデータを対象に解決すべき課題を抽出し、抽出した課題を解決するために、多様な事前知識をアルゴリズムとして組み入れ、独自のシステムをプログラミング言語により構築する。そして、実データでシステムを評価し、社会実装する方法を身につけることを目指す。
	データ解析学特論	医療分野における実データの多角的な解析スキルを身につけるための教育を行う。基本統計量、多変量解析、仮説検定などについて、その理論背景を学ぶとともに、エクセル等による実習を通じて、統計手法や統計的検定に対する理解を深めるとともに、実用スキルを身につける。また、機械学習やクラス分類など、人工知能手法を用いたデータ処理手法について学ぶ。

	授業科目の名称	講義等の内容
鍼灸分野	鍼灸臨床技術学実習Ⅰ	本科目では、鍼灸医療の現場で求められる問診技術・病態把握・治療計画策定・安全性管理・倫理性・生活指導などの実践的な臨床技術の習得は元より、臨床における資質を網羅的に訓練することを目的とする。鍼灸臨床技術学実習Ⅰでは、主に中国伝統医学に基づいた診療が行えることを目標とする。
	鍼灸臨床技術学実習Ⅱ	本科目では、鍼灸医療の現場で求められる問診技術・病態把握・治療計画策定・安定性管理・倫理性・生活指導などの実践的な臨床技術の習得は元より、臨床における資質を網羅的に訓練することを目的とする。鍼灸臨床技術学実習Ⅱでは、主に現代医学に基づいた診療が行えることを目標とする。
	鍼灸臨床技術学実習Ⅲ	本科目では、鍼灸医療の現場で求められる問診技術・病態把握・治療計画策定・安全性管理・倫理性・生活指導などの実践的な臨床技術の習得は元より、臨床における資質を網羅的に訓練することを目的とする。鍼灸臨床技術学実習Ⅲでは、症例報告が行えることを目標とする。
	鍼灸技術学特論	鍼灸技術の科学化の方法論と実際の応用例について学ぶ。基礎技術では①クリーンニードルの開発、②鍼レオメータの開発、③刺鍼練習台の開発、④超音波診断装置の応用による生体内刺鍼部位の画像化、⑤触診技術の客観化について、臨床技術では①絶縁鍼の開発、②皮膚インピーダンス測定技術と経穴、③灸燃焼温度の測定技術、以上より医用工学、画像工学を鍼灸技術の修得に取り入れた場合、触覚でしかつかめなかった技術を可視化でき効率的な技術修得が可能となることを理解する。
	実験鍼灸学	実験鍼灸学は現代科学技術および実験方法を用いて、鍼灸の基礎理論・メカニズムなどを研究し、臨床実践に資する学問である。本講義で、実験鍼灸学における基本的な研究方法を解説したうえで、経絡・経穴の現代研究方法、刺鍼手技・灸の研究方法を中心に講義する。また、パルス、電熱鍼、レーザー鍼など特殊な鍼灸療法の特徴・操作法・効能について学ぶ。また神経系、循環系、免疫系、消化系、内分泌系における鍼灸の作用機序と現在の研究動向について修得する。実験動物の経絡および経穴についても紹介する。

	授業科目の名称	講義等の内容
看護学分野	看護理論	看護に関連した現象を意図的かつ体系的に表現している看護理論は、看護実践をよりよいものにするために活用される。このことを理解し、メタ理論、大看護理論、中範囲理論、実践理論について学習し、実際の現象（事例）の看護過程を展開するなかでどの看護理論を活用するかを探究する能力を修得する。
	看護研究方法論	看護の発展に寄与するために研究の意義と重要性を理解し、看護学研究のプロセスである文献検索方法、看護研究方法の種類と量的・質的研究の特徴、研究計画から発表までのプロセス、研究者としての責任や倫理的配慮を修得する。また、自らの研究課題に最も適した研究タイプや研究方法を選択できる能力を修得する。
	看護倫理	看護倫理の原則を学習し、看護学としての生命、個人の尊重、人間の尊厳とは何かを考えながら、多様な看護場面における看護専門職の倫理的感受性を高める。また、実際に自らが経験した事例を分析して、看護専門職としての倫理的役割を果たすために必要な倫理的意思決定の過程や多職種間の倫理的調整を行うための能力を修得する。
	リーダーシップ特論	組織や集団における一般論的なリーダーシップについて理解し、より良い医療を提供するため看護専門職の果たすべき役割としてのリーダーシップを修得する。事例を通して、リーダーシップを実践するために必要な知識、問題解決能力、調整能力、リーダーとしての意思決定・発信力などの能力を修得する。
	ヘルスアセスメント特論	人々の健康状態を看護学の視点から客観的・主観的に明らかにし、日常生活や社会生活にどのような影響を及ぼしているかについてアセスメントするための知識・技術・態度を修得する。
	看護実践教育学特論	看護専門職の継続教育の考え方と方法について理論的根拠に基づいて学習し、医療機関、教育機関において教育的役割を担うために必要な能力を修得する。具体的には、看護学教育の歴史と現状の把握、現行の看護人材育成プログラムのクリティークを通して、課題を明らかにする。さらに、看護教育のカリキュラム編成、院内教育プログラムの立案過程や指導方法、評価方法について理解し、看護専門職者として教育的機能を果たすための自己の課題を論述する。
	看護実践支援特論	専門看護学分野における看護実践を通して抱いた臨床疑問に関連する先行研究を抄読し、問題解決や効果的な支援につながるエビデンスを明らかにする。またこれらのエビデンスを実践と研究に適用する方法を探究する。
	看護実践支援演習	各看護学における看護問題の分析および解決に向けた効果的な支援に活用できる理論や方法論を学び、自身の専門領域における課題の分析と支援計画の立案を行う。また理論と実践を統合し、臨地場面でより質の高い看護実践を提供するために、看護専門職の指導的役割について考察する。
	看護実践支援実習	各看護学において対象者の複雑な看護問題や教育的課題を把握し、理論や先行研究を基盤とした課題の分析と自己の研究課題に応じた実習計画の立案を行い、看護援助を実施・評価して、研究的視野を広げる。
医療科学輪講（修士）	在学期間を通して少なくとも4回、大学院担当教員と全大学院生を対象とした発表会でプレゼンテーションを行う。2回は指導教員の指導の下で、修士論文研究にかかわる原著論文または総説（英文が望ましい）を選び、	

	授業科目の名称	講義等の内容
専攻共通	医療科学輪講(修士)	その内容を紹介する。あとの2回は修士論文研究の計画・進捗状況・研究結果・考察等について報告する。全学生の必修とする。
	医療科学特別研究(修士)	在学期間を通して指導教員の下で調査や実験を中心とした研究を行い、その成果を修士論文としてまとめて発表する。研究課題は、各自の主分野及び分野共通の大学院担当教員の指導研究課題リストの中から選択し、入学願書に希望を申告する。入学後、協議によって指導教員と研究課題を決定する。大学院担当教員と全大学院生を対象とした発表会での発表をもって修士学位論文の審査とする。全学生の必修とする。